後撰集の詞書・組織に関する一考察

——四季歌「題知らず」をめぐって——

木越　隆

一

最初の勅撰集である「古今和歌集」については、その構成・和歌配列等に関する考察も多く、ごく最近においても、鈴木知太郎氏の「古今集哀傷歌における配列」（語文・第十五輯・昭和三十八年六月）、島田良二氏の「八代集の雑歌についてのノート」（国語と国文学・昭和三十九年一月）などがあり、また概括的にまとめられたものとして、久曽神昇氏の「古今集・新古今集の構成」（国文学・第九巻第九号・昭和三十九年七月）がある。しかし「後撰和歌集」に関して、近時、直接その構成組織を考察されたものとしては、松田武夫氏の「後撰集の組織における「混乱」について」（国語と国文学・昭和三十二年十二月）をみるくらいである。私もその驥尾に付し、後撰集の四季歌の組織を特に「題知らず」の歌から少しく考察してみようと思う。（なお、引用する場合、「万葉集」「古今集」は日本古典文学大系、「後撰集」「拾遺集」は岩波文庫を用い、歌番号も各々に付されている番号を記する。）

二

古今集撰集以前の大きな歌合で現存する代表的なものは「寛平御時后宮歌合」（以下「寛平歌合」という）であろう。この歌合と勅撰集・私家集との関係を詳細に述べられたのは久曽神氏である（「寛平御時后宮歌合考」（知大学文学論叢・第八輯）。また萩谷朴氏の「平安朝歌合大成巻一」のこの歌合の項にも、その入集歌などの関係が書かれている。

しかし、私の調べたのと、両氏のいわれる後撰集入集歌とが僅かであるが違うようなので煩雑ではあるが、入集歌を列挙する。

註(1)　歌の右側の——の個所に「平安朝歌合大成」の「寛平歌合」の歌、または「新撰万葉集（原撰本）」との異同があり、それを歌の下に「寛平歌合」の場合は「ひらがな」、「新撰万葉集」の場合は「カタカナ」で示し、また「寛平歌合」「新撰万葉集」共に同じ異同の場合は「ひらがな」を（　）でくくって示す。

(2)　歌の下の［　］内の上段は前記「歌合大成」に付されている歌番号、下段は未刊国文資料「新撰万葉集」の番号である。

一　「寛平歌合の歌」と詞書のある歌

12　吹く風や春立ち来ぬと告げつらん枝に籠れる花咲きにけり［補2・上春8］

273　浦ちかく立つ秋霧は藻塩焼く煙とのみぞ見え渡りける［79・下秋1］——タチ

353　花すゝきそよともすれば秋風の吹くかとぞ聞くひとりぬる夜は

〔104・上秋9〕――（ころもなきみ）

二　寛平歌合にあるが詞書の異っている歌

女ども花見むとて野辺に出でて

112 春くれば花み[1]にとおもふ心こそ野辺の霞とともにたちけ[2]れ[3]〔12・下春7〕――たた[1]・（みむてふ[2]）・ヌレ[3]

延喜の御時、歌めしければ

307 秋の野の草は糸ともみえなくにおく白露を玉とぬくら[1]ん[2]〔81・下秋2〕――シモ[1]・（つらなる[2]）

308 白露を風の吹き敷く秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける〔90・上秋2〕――ととのは

秋の歌とてよめる

318 秋の夜の月の影こそ木のまよりおちば衣と身にうつりけれ〔113・下秋20〕――ミエワタ

女のもとに初めてつかはしける

602 人をみて思ふおもひもあるものをそらに恋ふるぞはかなかりける〔159・下思(6)（原撰本ナシ）〕――（ことだに）

公頼朝臣、いまゝかりける女のもとにのみまかりければ

943 ながめつゝ人待つよひの呼子鳥いづかたへとか行き帰るら[1]ん[2]〔77〕――をりに[1]　たちかへりなく[2]

三　「題知らず」の詞書の歌

64 大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ〔24・下春13〕――を

165 にほひつゝ散りにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば〔42・下夏6〕――（りて）

193 つねもなき夏の草葉に置く露を命とたのむ蟬のはかなさ〔48・上夏18〕――はか・ツレ

206 夏の夜は月はほどなく明けぬればあしたのまをぞかこちよせつる〔44・下春3〕――（の）[1]・（ながら）[2]・（け）[3]

263 風さむみ鳴く松虫の涙こそ草葉色どるつゆとおくらし〔103・下秋16〕――ヅク（め）[1]　ヅク（め）[2]

355 秋風にさそはれわたる雁がねは雲のはるかにいまぞきこゆる〔89・下秋6〕――きつ（ぬ）[1]（けふ）[2]

407 秋の夜に雨ときこえて降りつるは風にみだるゝ紅葉なりけり〔95・下秋10〕――を[1]　ちりつ[2]・チリケ

449 吹く風は色も見えねど冬くればひとりぬる夜の身にぞしみける〔129・下冬10〕――ユクモシラ

465 かきくらし霰ふりしけ白玉をしける庭とも人のみるべく〔118・上冬5〕――ツメ[1]　ノ[2]　ガニ[3]

477 霜枯の枝となわびそ白雪の消えぬ限りは花とこそみれ〔130・上冬4〕――（をはなに[1]やとひてみれども[2]あかず）

485 白雲のおりゐる山と見えつるはふり積む雪の消えぬなりけり〔137・上冬10〕――やど[1]・とけ[2]

487 流れゆく水こほりぬる冬さへやなほ浮草の跡はとゞめぬ〔121・下冬2〕――（さだ）

489 天の河冬は氷にとぢたれや石間にたぎつ音だにもせぬ〔119・下冬1〕――ウラサヘコホリケル

493 松の葉にかゝれる雪のうれをこそ冬の花とはいふべかりけれ〔142・上冬3〕――（ひかりまつえだにかかれるゆき）

494 降る雪は消えでしばしもとまらなん花も紅葉も枝になきころ〔134〕――えだに[1]　たえて[2]　まは[3]

495 涙川身投ぐばかりの淵はあれど氷とけねばゆく方もなし〔139・上冬17〕――ナ・(かげもやどらず)

以上、二十五首である。

三の「題知らず」の詞書をもつ歌について、久曽神氏は前記論文でこのうち十首（64 165 193 206 355 465 485 487 494 495）を挙げておられるが、私は右に示したように十六首と思う。そして、「何れも語句に相違が存するので、歌合以外の資料によったものであらう」とされているが、大きく相違するのは、477・493の二首である。193の「つねもなき」が「はかもなき」になっているが、新撰万葉集で「つれもなき」になっているので、歌合は何かで誤ったものと思う。407は「みだるる」が「ちりつる」、487は「とどめぬ」が「さだめぬ」、495「ゆく方もなし」が「かげもやどらず」程度の相違なので、大部分はこの歌合から採ったとみてよいであろう。

また、寛平歌合の頃行われた「是貞親王家歌合」の歌も十四首入集されているが、そのうち八首は「題知らず」である。しかし、現存の是貞親王家歌合は寛平歌合ほど確かな本文ではないので、ここでは一応考察から除外する。

さて、寛平歌合の歌は二十五首が後撰集に採られているが、詞書に「寛平御時后宮歌合の歌」と明記しているのは三首のみで、十六首は「題知らず」である。古今集では五十四首採歌しているが、その大部分の五十首がこの歌合の歌であることを詞書に明記しているのとは大きな違いである。そして、この「題知らず」の歌は、494を除いたすべてがこの歌合と密接な関係にある新撰万葉集に収録されているから、寛平歌合の歌とみとめてよかろう。しかしこれについて、高野平氏は「後撰集と新撰万葉集の共通歌について」（文学論藻・第二十二号・昭和三十七年五月）と題する御論考の中で、両集の共通歌は、後撰集が新撰万葉集を資料としてなったものであると論じておられる。そして寛平歌合を資料としたならば、詞書にそう書くべきだともおっしゃっていられる。高野氏もこの御論考の冒頭で述べていられるが、源順撰の「和名抄」には「新撰万葉集」の名が出てくるから、順がこの集を見ていたことは確かであろう。そのため、後撰集撰集に新撰万葉集を参考にしたと考えられないことはない。しかし、それとともに、後撰集のなかに少数ではあるが、「寛平歌合」という詞書のある以上、この歌合も見ていると考えられる。そうすれば、高野氏は抽象論だとされておられるが、やはり異同の多少、また内容の相違などから考えれば、たとえ「題知らず」であっても、異同の少い寛平歌合から採取したとみてよいと思う。

それに高野氏は「新撰万葉集との共通歌が比較的まとまって採られていることも見逃し得ない」と論じておられるが、それが新撰万葉集の記載順通りとかいうのならともかく、そうではないので、特に密接な関係ともいい得ないのではなかろうか。

三

さて、私がここで問題にするのは「寛平歌合」（または「新撰万葉集」であっても）の歌を何故「題知らず」として入集したかということである。それを考える前に三代集の「題知らず」の歌を概観するために、三代集の各巻の総歌数と「題知らず」の歌の数を比較すると次頁のようになる。

そして、これを更に四季歌・恋歌・雑歌（前の二者以外すべて含

	古今集				拾遺集				後撰集			
巻	部立	A	B	%	部立	A	B	%	部立	A	B	%
1	春上	68	21	31	春	78	32	44	春上	46	16	34
2	下	66	21	32	夏	58	19	33	中	34	7	21
3	夏	34	15	45	秋	78	32	41	下	66	14	21
4	秋上	80	38	48	冬	48	18	38	夏	70	34	49
5	下	65	16	25	賀	38	3	8	秋上	54	30	56
6	冬	29	10	34		53	13	24	中	80	28	35
7	賀	22	4	18	物名	78	0	0	下	92	60	65
8	離別	41	8	20	雑上	77	14	18	冬	65	49	75
9	羇旅	16	3	2	下	67	7	10	恋一	94	23	25
10	物名	47	0	0	神祇	45	2	4	二	99	16	16
11	恋一	83	79	95	恋一	77	54	73	三	95	13	14
12	二	64	43	67	二	79	53	67	四	96	6	6
13	三	61	50	82	三	72	49	68	五	103	15	15
14	四	70	59	84	四	76	60	79	六	81	11	14
15	五	82	73	89	五	75	64	85	雑一	50	0	0
16	哀傷	34	2	6	雑春	82	18	22	二	70	8	11
17	雑上	70	35	50	秋	77	22	29	三	55	9	16
18	下	68	34	50	賀	51	7	14	四	54	16	30
19	雑体	68	57	84	恋	64	24	38	別旅	64	7	11
20	大歌	43	0	0	哀傷	78	8	10	賀哀	58	2	3

Aは総歌数・Bは「題知らず」の歌数，題知らずの贈答歌は二首に数える。

む。拾遺集の「雑春」「雑秋」もここに入れる）の三つにわけ総括してみると下のようになる。このようにしてみると、それぞれの「題知らず」の歌は後撰集の四季歌、古今、拾遺集の恋歌、古今集の雑歌に多く現れている。

恋歌で比較すると、古今集巻第十一恋歌一では469→475と480→551はすべて「題知らず」で、詞書のあるのはわずか476→479にすぎない。これにより恋の心の機微な動きのニュアンスを表現している。わざわざ詞書をつけて、生々しい現実としての恋の表現を避けたと思われる。そしてこれは恋歌各巻に共通した傾向である。また拾遺集の巻第十一恋一でも、中に二首だけつづく場合もあるが、625→632、638→642、644→652、663→669、679→686、691→697のように大体が五首以上まとまっている。特に恋五では926→940と十五首が連続して並べられ、古今集のような著しさはないが、同じような傾向をもっている。

	古今	拾遺	後撰
四季歌	36%	39%	47%
恋歌	84%	74%	15%
雑歌	35%	17%	11%

これに対し、後撰集は恋歌が巻第九より巻第十四まで五七八首あるが、その中で、一番長くつづいて八首である。このように、後撰集の恋歌で「題知らず」の歌が少ないのは、後撰集の特徴の一つに挙げられている「歌集の物語化」という点から推して、物語化するのに最もふさわしい恋歌には詞書をつけるため、当然のことである。これについて、佐藤高明氏は「後撰集の恋歌の詞書について」（「言語と文芸」昭和三十八年十一月）で、普通なら「題知らず」になるような歌にまで「女につかはしける」程度であっても、詞書をつけ、歌物語的資料を提供し、説話的話柄の素材にしようとしたのだろうというように説明しておられる。

そこに、誰に、どういう歌を贈ったということよりも、歌自体の意味内容によって「恋」そのものをうたおうとする古今集、または拾遺集的な歌風との違いがみられる。

後撰集の四季歌をみると、恋歌の場合とは逆に、有名な歌人の歌

までが「題知らず」となっている。閑院左大臣(冬嗣)、貫之、深養父、伊勢、躬恒、千里などがそれである。特に貫之は、四季歌にある四十首中、十二首を数える。ちなみに貫之は古今集の場合は四季歌中では「題知らず」は一首もない。また拾遺集では三十四首中四首のみである。貫之は「自撰貫之集」などもあったらしいし、伊勢の歌にもその資料とすべき家集もあったことだろうし、どういう場合の歌かは、撰者が五人もいれば解ったはずである。このことや前記の「歌合の歌」を「題知らず」にしていることなどを思い合わせると、「題知らず」とすることに何か意識的なものを感ずるのである。

では、その「題知らず」の歌が四季歌にどのように入れられているか。たいへん無味乾燥であるが、番号で示すと次のようになる。下の(　)の漢数字は連続している歌数である。二首連続の場合は省く。

春上　8・16・22→28(七)・31→37(七)
春中　55・62→64(三)72・74・76
春下　84・87・88・90→92(三)97・101・109・120・124・131・141 142
夏　147 148・155 156・159・163→165(三)・169 170・177 178・180 181・184・186→188(三)・192→195(四)・197→202(一一)・204→208(五)210・213
秋上　218・221・226・233→236(四)・241→247(七)・251→264(一四)・268・270
秋中　290→292(三)・295 296・302→305(四)・310→315(六)・329→333(五)・339→346(八)
秋下　351 352・354 355・357 358・360→364(五)・368→379(一二)・381・383・385 386・388→392(五)・397 398・402→422(二一)・428・435・437
冬　443→452(一〇)・457 458・461・463・465→470(六)・470→479(四)・482→506(二五)

ここで気付くことは、「題知らず」の歌が殆んど一連の歌群となっているか、または、381・383・385 386のように、極めて短い間隔で記載されていることである。

そして、また四季歌の中には、後撰集の特徴の一つである、長い詞書や、贈答歌も散見するが、詞書の大部分は短い、簡単に詠歌対象を示すにすぎないものである。例として秋中の詞書をみると次のようである。

271 272＝「延喜の御時に秋の歌めしければ奉りける」273＝「寛平の御時、后の宮の歌合に」274→276＝「朱雀院の女郎花合に」277→286＝贈答歌五対287＝「男のもとにつかはしける」288→292＝贈答歌二対(「題知らず」を含む)293 294＝長い詞書295 296＝「題知らず」297＝「萩の花折りて人につかはしける」298→300＝「秋歌とてよめる」301＝「年のつもりにけることを、かれこれいひ侍りけるついでに」302→305＝「題知らず」306→309＝「延喜の御時、歌めしければ」310→315＝「題知らず」316→322「秋の歌とてよめる」323 324＝「是貞の親王の家の歌合に」325 326＝「八月十五日夜」327 328＝「月をみつつ」329→333「題知らず」334＝「是貞の親王の家の歌合の歌」335＝「露をよめる」336＝「八月十五夜」337＝「延喜の御時、秋の歌召しければ奉りける」338＝「人につかはしける」339→346＝「題知らず」347＝「前栽に女郎花いとおほかる所にて」348＝長い詞書349 350＝贈答歌一対

右の例でもわかるように、贈答歌や293 294 348の歌をのぞいては、この詞書がなくては、歌の理解、把握にそう差し支えるというものではない。結局、詠歌対象たとえば「秋の歌とてよめる」とか、詠じ

た時「八月十五夜」というようなものを、単に示すにすぎないのである。極端にいえば、この程度の詞書はなくてもすむのではないかと思えるぐらいである。春の歌は「題知らず」や、短い詞書が比較的少ないが、夏秋冬の巻ではその感は強い。

また一つ注意されることは古今集と後撰集における「歌合の歌」のとり上げ方の違いである。古今集の例をみると次の如くである。

(Ⅰ) 春の初めの歌

11はるきぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

12谷風にとくる氷のひまごとに打ち出づるなみやはるのはつ花

13花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

14鶯のたによりいづるこゑなくは春くることをたれかしらまし

15春たてど花もにほはぬ山ざとは物うかるねにうぐひすぞなく

題しらず

16野辺ちかくいへゐしせれば鶯のなくなるこゑはあさなあさなきく

(Ⅱ) はつかりをよめる

206まつ人にあらぬものからはつかりのけさなくこゑのめづらしき哉

是貞のみこの家の歌合のうた

207秋風にはつかりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらん

題しらず

208わがかどにいなおほせどりのなくなべにけさ吹く風にかりはきにけり

(Ⅲ) 題しらず

638 あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬおもひそふらむ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

639あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそぼちつゝ

題しらず

640しののめのわかれををしみ我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

古今集の四季歌は周知の如く、時の推移に従って同一主題の歌は一ケ所に載せるのであるが、(Ⅰ)では11と16に「鶯」がよみ込まれているにもかかわらず、12の歌のように「鶯」をよまない歌を採り、つづいて「鶯」をよんだ歌を三首載せている。(Ⅱ)では同じ「初雁」でも歌合の歌には中国故事の内容をもつ、当時の代表的詠風の歌をもって際だたせている。(Ⅲ)は「恋歌」であるが638と同じ初句の、しかも内容的にも優れている歌を並べる。窪田空穂氏はこの639の歌を評して、「当時の新風として自然も人間も同じ心を持ってゐる」歌といわれている(古今和歌集評釈)。これらはすべて、歌合の歌を歌の手本というように特別視していると考えられる。ここでは三例を挙げたが、このような例は他にも多くみられし、また歌合の歌から主題を変える例239などがある。このような採歌法をとってこそはじめて「歌合の歌」という詞書が生きてくるのである。これに対して後撰集では

(Ⅰ) 初春の歌とて

11水の面にあや吹き乱る春風や池の氷を今日はとくらむ

寛平御時、后の宮の歌合に

12吹く風や春立ち来ぬと告げつらん枝に籠れる花咲きにけり

(Ⅱ) 秋の歌とてよめる

321秋の池の月のうへこぐ船なれば桂の枝に棹やさはらむ

322秋の海にうつれる月を立ちかへり浪はあらへど色もかはらず

是貞の親王の家の歌合に

323 秋の夜の月の光は清けれど人の心のくまは照らず

324 秋の月つねにかく照るものならば闇にふる夜はまじらざらまし

(Ⅲ) 題しらず

352 秋風にあひとしあへば花すゝきいづれともなく穂にぞいでける

寛平の御時、后の宮の歌合に

353 花すゝきそよともすれば秋風の吹くかとぞ聞くもとりぬる夜は

だいしらず

354 花すゝき穂にいでやすき草なれば実にならんとはたのまれなくに

となる。(Ⅰ)(Ⅱ)の例なぞは、歌合の歌の前に載せられた歌の方が、当時の「古今集的歌風」の理智的表現からみれば優れているくらいである。また(Ⅲ)は同じ「花すゝき」を詠んでも前後の歌と比べて、古今集のような顕著な差違はみられない。このように、後撰集では、ただ前の歌につづけるためだけの目的で歌合の歌を採用しただけで、「歌合の歌」という特色はないのである。こう考えると、「歌合の歌」というのはいわば左注的なもので、「題知らず」かまたは(Ⅱ)の例なら「秋の歌とてよめる」の詞書に包括してよいものである。そうすると、前記、秋中の271 272の「延喜の御時に秋の歌めしければ奉りける」は「秋の歌」、274→276の「朱雀院の女郎花合に」は「女郎花」という短い詞書になおしてよかろうと思う。

さて以上みてきたところによると、この集の撰者は、四季歌に関しては、贈答歌、恋に類する歌のような特に長い詞書の必要な歌以外は、短い、詠歌対象だけを示す詞書かまたは「題知らず」として採録しているのである。そうすれば、寛平歌合の歌の大半が「題知らず」として採られていることも納得できるのである。

古今集の和歌配列法は前にも述べたが、四季歌の場合、時の推移に従い、しかも同一主題の歌は一箇所に連続して並べるという、ひじょうに整然としたものである。しかし後撰集では「梅」とか「桜」とかいう主題をバラバラに配置しているのである。前記、秋中の「八月十五夜」の歌が間隔をもって二ケ所にあるようなものである。

これについて、松田氏は「混乱」と称され前記論文で、春歌を例にとって、その組織を克明に調べられ、最初、古今集の春歌の組織に準拠してその骨子が作られ、主題的意識により、同一主題のもとに所属する歌は一箇所にまとめられていたが、何等かの意図によりそれが適宜分散されて、現存本のような組織が出来上った、というように説明しておられる(傍点は筆者が付した)。この「混乱」は春歌には多いが夏歌以下はそう混乱はしていないようだが、古今集の組織の整然さと比べれば、雑然として、後撰集の特徴の一つに挙げ得べきものである。

四

古今集の意味のある詞書、整然とした組織に比べると、後撰集は、詞書も贈答・恋歌ばかり長く、他は「題知らず」か短い申し分け的な詞書であって、またその組織も雑然としている。こういうところに、後撰集「未定稿説」も出てくるのである。

成程、現存後撰集は、元来、未定稿で整然と配列する前に、ただ春歌は春の部に、夏歌は夏の部にというように集めておき、これから古今集のように配列しようとしている型である。だから歌も思いつくままに書いたから「題知らず」や短い詞書の歌も多いのだとい

う考え方もあろうかと思う。しかし、高野氏も前記論文の中でおっしゃっているが、ただ伝承のみで、あれだけの歌が書けたとは思えないし、もし未定稿であれば殊にその出典を明記してあることと思う。また組織の「混乱」も松田氏の御論によれば、何等かの意図により、なされた。要するに、「題知らず」の詞書も、また「混乱」も未定稿なる故の「題知らず」でもなければ「混乱」でもないとみたい。

そうすると、一応、勅撰集として編集するからには、こうした編集の仕方に、撰者たちは、何か拠り所をもっていたのではないかと思う。先例を重んずる当時に、ただ私意によってのみ、編集したとは思われない。

天暦五年、村上天皇の命で、撰和歌所に参集した彼等は、万葉集の訓話をし、後撰集の撰集をした。そのいずれが先であったかは、判然としないが、後撰集の編纂の時、万葉集のことが、何らかの形で念頭にあったことは確かであろう。

それは、後撰集に万葉集から採った歌があることでもわかる。

22 我がせこにみせんと思ひし梅の花それともみえず雪の降れゝば（万葉巻八・一四二六）

33 かき（万葉うつち）くらし雪は降りつゝしかすがにわが家の園に鶯ぞ鳴く（万葉鶯鳴くも）（万葉巻八・一四四一）

187 旅寝（万葉に）して妻恋ひすらしほとゝぎすかみなび山にさ夜更けて鳴く（万葉巻一〇・一九三八）

37 君がため山田沢にゑぐ摘むと濡れにし袖は今も乾かず（万葉下句「雪消の水に裳の裾濡れぬ」）（万葉巻一〇・一八三九）

そしてこれは後撰集を撰集するまでに、撰者たちが少なくとも万葉集をみていたことを示すのではなかろうか。

そうすれば、後撰集の編纂に万葉集の影響があったとみてよいと思う。

万葉集は、短歌の場合、詞書が概して簡単である。7「額田王の歌」、21「皇太子の答へましし御歌」のような作者しか示さないものは別としても

22「十市皇女伊勢の神宮に参赴りし時、波多の横山の巌を見て吹茨刀自の作る歌」

105「大津皇子竊かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌二首」

123「三方沙弥、園臣生羽の女を娶きて、未だ幾の時を経ずして病に臥して作る歌三首」

などが、長い方であるが、作者名や何首という部分を省けば、それ程長い詞書ではない。

そして多くみられるのは

141「有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首」

310「門部王、東の市の樹を詠ひて作れる歌一首」

150「五年戊辰、難波の宮に幸しし時作る歌四首」

のようなものである。もし万葉集が後撰集に影響を与えているとしたら、やはり、同じような部立・組織をもった巻であろう。それは巻八と巻十に特にみられる。日本古典文学大系「万葉集」の解説にも「歌を四季に分ち、それぞれの季を更に雑歌と相聞とに分類している。これは新しい分類法で、平安時代以後の歌集で四季が分類上第一の重要性を有して来ることの先駆をなす」とある。まず、巻八

で、その詞書をみると、大部分が1419「鏡王女の歌一首」のように作者名だけである。その他は1549「典鋳正紀朝臣鹿人の、衛門大尉大伴宿禰稲公の跡見庄に至りて作る歌一首」のような長いのもあるが、これ一首で、1418「志貴皇子の懽びの御歌一首」、1432「大伴坂上郎女の柳の歌二首」、1441「大伴宿禰家持の鶯の歌一首」、1468「小治田広瀬王の霍公鳥の歌一首」、1516「山部王の秋の葉を惜しむ歌一首」など単に、詠歌対象を示す形式の詞書である。平安時代以後の勅撰集の詞書なら「鶯を詠める　大伴坂上郎女」、「紅葉の散るを惜しみて詠める　山部王」とでもなるであろう。これが巻十になると、「何々を詠む」という形式の詞書となる。すなわち「鳥を詠む」(1819→1831)、「雪を詠む」(1832→1842)、「月を詠む」(1874→1876)、「花を詠む」(1966→1975)、「七夕」(1996→2093)、「露を詠む」(2330)といった具合である。以上は「雑歌」の例であるが、「相聞」でも「鳥に寄す」(1897→1898)「草に寄す」(1919→1921)「別れを悲しぶ」(1925)のように実に簡単な詞書である。巻十一・十二になると、もっと簡単で「旋頭歌」「正に心緒を述ぶ」「物に寄せて思を陳ぶ」とかいう詞書で何十首という歌を並べている。巻十一の「物に寄せて思を陳ぶ」は一九二首の歌が並んでいる。

このように、万葉集の短歌に関するもう一つの特色は、詞書(題)が一つあり、それに関する歌が何首か並ぶ形式が多いことである。前記、巻十の「鳥を詠む」は十三首、「雪を詠む」は十一首の歌を並べる。

鳥を詠む

1819 うちなびく春立ちぬらしわが門の柳の末に鶯鳴きつ

1820 梅の花咲ける岡辺に家居ればともしくもあらず鶯の声

1821 春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも

1822 わが背子をな越しの山の呼子鳥君呼びかへせ夜の更けぬとに

(以下略)

また、他の巻でも同様である。

五年戊辰、難波の宮に幸しし時に作る歌四首

950 大君の境賜ふと山守すゑ守るとふ山に入らずは止まじ

951 見渡せば近きものから石隠りかがよふ珠を取らずは止まじ

952 韓衣着奈良の里の島松に玉をし付けむ好き人もがも

953 さ男鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君にはた逢はざらむ

これらは笠金村、或いは車村千年個人の歌であるが、作者が別々であっても

竹敷の浦に舶泊てし時に、各々心緒を陳べて作る歌十八首

3700 あしひきの山した光る黄葉の散り乱(まが)ひは今日にもあるかも

右の一首は、大使のなり

3701 竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時そ来にける

右の一首は、副使のなり

3702 竹敷の浦廻(うらみ)の黄葉われ行きて帰り来るまで散りこすなゆめ

右の一首は、大判官のなり

3703 竹敷のうへかた山は紅の八入(やしほ)の色になりにけるかも

右の一首は、小判官のなり(以下略)

となる。このように一応「鳥を詠む」とか「花を詠む」とか、どういう折に詠んだという詞書があっても、十首も二十首も、まして二百首近くも並ぶのでは個々の歌に関しては詞書がないのと同じである。すなわち、「題知らず」の連続とみてよい。

万葉集は古今集に比べて、部立も大まかであり、和歌配列等組織

も整然としていないということは古くからいわれている。その中でも、部立・組織等がキチンとしているのは、前記の巻八・十である。しかし、その組織を詳細にみると、古今集のように統制のとれたものではない。たとえば、巻十の春雑歌の「花を詠む」の二十首の短歌の主題が次のように並んでいる。

梅・桜・梅・梅・梅・梅・山吹・桜・梅・久木・桜・桜・桜・桜・馬酔木・桜・桜・梅・桜・梅

また、主題を梅に限ってその配列をみても、第一首から「鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時片設けぬ」と梅の散ることを詠み、第二首も「わが挿せる柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ」と梅の散る歌だが、第七首目に「春されば散らまく惜しき梅の花暫は咲かず含みてもがも」と春の初めの歌になり梅の咲く頃のことを詠んでいるように、時の推移にあわせる統制もない。巻八でも同様で「春雑歌」は、

春来る・呼子鳥・梅(?)・若菜・梅・梅菫・桜・梅・雪・馬酔木・桜・鶯・柳・柳・梅・山吹・梅……

とその配列に何らの統制も見出せない。

さて、右に述べたような、詞書・組織の例が、後撰集の撰者として、短歌集はかく編纂すべきだ、またはしてもよいという考えをもたせ、その考えが四季歌において「秋歌としてよめる」程度の短い詞書や「題知らず」(しかもある程度連続した)、それにいわゆる組織の「混乱」となって表われたのではなかろうか。特に後撰集の冬歌の最後の476から506にわたる「題知らず」の連続(中に480481の詞書をもつ歌もあるが)は冬歌総歌数の半分を占め、この部分に寛平歌合の歌がありながら(477485487489493494495)それを示さず、またその中の「混乱」を思い合わせるとその感を強くする。

なお、後撰集の四季歌には、その季節に応じた恋歌が入っている。松田氏は同じ論文で春歌にある十三首の恋歌は、初め春歌の第十三首目か第二十首目のところに集められてあったと推定しておられる。それはともかくとして、四季歌に恋歌を折り込むことは、やはり万葉集の四季の「雑歌」と「相聞」とが合併されていることによると考える。もし、松田氏のおっしゃるように、四季の恋歌がまとまっている場合、四季の中途ではなく、四季それぞれの最後にあったとしたら、その組織は万葉集に類似している。しかし、整然とした組織を乱すことによって、万葉集に似てくるのであるから、これは単なる憶測にすぎない。

五

ともあれ、後撰集の四季歌の成立に関しては、万葉集の影響があるとみたい。(なお、後撰集成立に万葉集の関係のあることは松田氏も概括的に推論しておられる(「古今集から新古今集へ」国文学・第九巻第九号))そして一応、例として、巻八・十を主に挙げたが、万葉集のどの部分が、後撰集のどの部分へという直接的影響はないにしても、後撰集の四季歌の編纂態度に与えていると考えるのである。この態度がひいては、

27梅の花よそながらみんわぎもこがとがむばかりの香にもこそしめ

362行きかへりこゝもかしこも旅なれや来る秋ごとにかりかりと鳴く

498梅が枝にふりおける雪を春近み目のうちつけに花かとぞみる

のような、自由な詠みぶりの歌を選ぶよりになり「無名抄」に「姿をばえらばず、心をさきとせり」と評されるようになったと思う。

そして、これらは心より、むしろさま姿を重んじた古今集的歌風に反するものである。

松田氏は後撰集の意識的な「混乱」を古今集への反逆が試みたといわれているが、その反逆の基礎・拠点を古今集以前のしかも当時においても最大であったであろう歌集「万葉集」においたことも当然と肯けるのである。こういう和歌に対する姿勢が、撰者源順・大中臣能宣と親交のあった曽禰好忠や、その他、源重之など新しい時代の歌人に受けつがれ、新しい和歌の時代を招来したのではないかと思うのである。